

論文の内容の要旨

論文題目 討議論としてのヴェーバー社会学

氏 名 矢野 善郎

この論文は、マックス・ヴェーバーの社会学が有している「討議論」としてのアスペクトに着目することで、そこで採用された社会科学像および文化・歴史認識のためのグランド・デザインを、より明晰かつ整合的に把握し、そしてそれを、今日的な問題状況に 대응する「討議的な社会理論」を構築していくための礎石とする試みである。

ここで言う「討議論」とは、討議の社会的意味を、それを論じる社会科学そのものの討議の再帰的な反省も含めて探求するという研究のプロジェクトのことを指す。この論文では、ヴェーバーの社会学の認識論的考察や方法論が、彼が〈価値討議〉と呼ぶ独特な討議像を中心軸として、こうした再帰的な反省の構造をとっていたことを示す。そしてそれを明らかにすることで、従来のヴェーバー研究では分裂的に描かれることの多かった、彼の認識論・方法論（とりわけ「価値自由」論）と、彼のより具体的な歴史社会学の成果とされてきたもの（とりわけ「合理化」論）とを、より総合的な視野の下に納めうることを論じる。

ヴェーバーは、「何故そしてどの点で一致しあえないのかについての認識。そうした認識こそ一つの真理の認識に他ならない。そして、この認識に仕えるものこそ〈価値討議〉なのである」と論じた。

この博士論文の第2章から第4章までは、ヴェーバーが、そうした〈価値討議〉に奉仕しようように、その人間行為の理解社会学の骨格を尖鋭化させていった過程を描き出す。とりわけ第4章では、彼が晩年に述べた二つの「理解」概念、「現実理解」と「説明的理解」について（ヤスパース等の学説的な系譜をたどりながら）考察する。ここでは、前者の「現実理解」で比較文化的な位置価という横系を確定し、後者の「説明的理解」で歴史因果関係という縦系の分析を行うという形で、二層の相互媒介的な理解をともなう方法論を構想していたことを論じる。

そして第5章から第7章では、こうした基礎的な方法論の再構成を承け、ヴェーバーのより具体的・内容的な社会学（『宗教社会学論集』・いわゆる『経済と社会』）で実際に用いられた分析手法についての再構成を、とりわけヴェーバー研究史で分析の焦点とされてきた「合理化」・「合理主義」などの〈合理〉概念群についての分析を中心として展開する。

まず第5章では、ヴェーバーの〈合理〉概念群についての方法論的な規定について整理し、それを「二重の方法論的合理主義」と名付ける。つまりヴェーバーが、a) 分析のプロセスにおいて

〈合理的構成〉という手法を用い、b) 比較文化の分析の照準点として〈合理主義〉概念を置いたという意味で、彼の社会学の方法論が二重に〈合理的であること〉に関わっていると整理する。そして、そうした二重の関わりが混同されることで、彼の社会学の研究史において、様々な解釈が派生したことを論じる。

次に第6章では、その結果、ヴェーバー研究史において「ヴェーバーの合理化論」なる言辭が、しばしば曖昧なまま一人歩きしてきた現状について理論的なサーヴェイを行う。ここではまず、ヴェーバー社会学における「合理化」概念の解釈史を分析するために、1) 「一方向的・特殊的」、2) 「一方向的・普遍的」、3) 「多方向的・特殊的」、4) 「多方向的・普遍的」の「合理化」論の四類型を構成する。そしてそのそれぞれの解釈類型についてヴェーバー自身のテキスト上の概念使用とつき合わせて検討することで、4) 以外の解釈類型では、多かれ少なかれ「合理化＝近代化」または「合理化＝西洋化」との実体化を伴った形でヴェーバーを解釈しているか、あるいはヴェーバーが「西洋的な合理化」を価値的に特権視していると解釈してきたことを批判的に論じる。そして今後のヴェーバー解釈では、ヴェーバーが、その〈合理〉概念群を「多方向的・普遍的」に使用していたものとして把握すべきとの解釈仮説を呈示する。

引き続き第7章では、以上の仮説を展開検証するため、彼が〈合理〉概念群を最も集約的に分析に利用した領域として、「宗教社会学」および「法社会学」を検討する。ここでは、彼が〈合理〉概念群を「多方向的・普遍的」に使用した方法論的合理主義の社会学を展開していることを、具体的な分析スキームを抽出しながら明らかにする。そして従来の解釈史でしばしば同一視されてきた「合理化＝脱呪術化」などの実体的な解釈とは裏腹に、ヴェーバー自身は「呪術の合理化」という用語を用いるまでに「合理化」の視点相対化を行っていたことを論証する。総括としては、むしろヴェーバーの社会学は、「近代」・「西洋」と「合理的であること」との仮想的な結びつきを断ち切り、そうした「合理的であること」の文化相対化を経て、“Ratio”の比較社会的な価値相対化を行い、最終的には“Ratio”そのものの〈価値討議〉にも寄与しようとしていたことを論じる。

結論章である第8章では、“Ratio”の比較社会学の成果の最も重要な例として、ヴェーバーがその晩年の宗教社会学の中で「科学」の比較文化社会学を展開していたことを論じる。そしてそれを承けて、ヴェーバーの社会学では、「科学的な討議」についての経験的・歴史的認識が、翻って、あるべき科学的討議についての方法論に反映されるという再帰的な構造がとられていたことを論じる。

この博士論文では最後に、こうした討議的な構造を伴うヴェーバーの社会学の思想的なインプリケーションについての考察を行う。ここでは、従来まで「神々の闘争」・「決断主義」等の言辭が過度にペシスティックに解釈されてきたことを批判し、ヴェーバーの社会学が、実践的な〈価値討議〉との相互奉仕を通して「日常」に對峙していくための、むしろポジティブかつプラグマティックな社会理論の礎石として継承されるべきことを論じて、論を結ぶ。